

## 華人社会について (4)

—華人社会の三角関係 ④—

シンガポール日本文化協会  
会長 顔 尚強

### (4) 経済の主流、幫派

#### 地縁による幫

秘密主義的な幫である「幫会」に対し、公開的な幫は「幫派」という。華人社会において、縁によってまとまった集団には一般的に、方言グループ毎にまとまった「地縁」、姓氏（苗字）ごとにまとまった「血縁」、業種または専門職ごとにまとまった「業縁」に分類できる。

華人社会においては、西洋社会のキリスト教、またはイスラム社会で見られるように、学校ごとの「学縁」、宗教ごとの「神縁」は発達していない。華人社会ではむしろ、各方言グループの需要に応じて集団化した神縁の組織はよく見られるが、地縁と血縁の組織と比較するとその勢力は弱い。学縁については、教育の普及率が高い日本社会と比較すると、勢いは弱い。しかし、シンガポールではこの二十数年間、政府が教育に力を注いできたことから、学縁（閩）の芽が出てきているようだ。

19世紀半ばごろから20世紀の初めまで、中国の福建省、広東省、海南省からシンガポールに移住してきた人々は、大半が読み書きのできない文盲であり、生活する上では先着の同郷者に頼らざるを得なかった。また先着者は、他の方言グループから防衛するため、新規移住者に便宜を図り、ついに彼らは一種の相互扶助の生活共同体であるゲマインシャフトをつくった。この生活共同体は、グループの安全、繁栄を祈るために神々を祭り、同郷者の亡魂を慰めるために義山（墓地）を購入した。また、同郷者間または他郷者間との間の紛争の調停などを行ったのである。

シンガポール、または南洋の初期の華人社会は、先祖の神々を受け継ぐと同時に、現地の習慣を取り入れて、中国本土では見られない祭祀活動をもつくり上げた。例えば表1に見られるとおり、現在まで華人社会で一般的に祭祀される神々の中で、唯一南洋でしか見られない神は大伯公である。大伯公は福德正神とも呼ばれる。伝説によると、中国本土では見られない大伯公は、広東省大埔県（客家県）に生まれた張理という人物。張理氏は、乾隆年間（1736－1795）にペナンに到着。幫会（2004年3月号参照）の一流派である天地会のメンバーであった張理氏は、丘兆祥氏と馬福春氏と結義して、私会党をつくった。同氏が死亡後、追随者は同氏の篤い義理人情を慕い、神として祭り上げ、大伯公という称号を与えた。（華人社会と宗郷会館、潘明智編、玲子出版社.Pg428）

華人社会が祭祀する神々は大きく分類すると、①道教の神々—玉皇大帝という君主の下

に北斗九星、三元大帝、太上老君などの老臣、②仏教の神々—釈迦、阿弥陀仏、弥勒物、菩薩、観音など、③神格化した人物—天后聖母、大伯公、関（羽）帝、斉天大帝（孫悟空）など—と3つに分けることができる。

日本人には馴染みのない天后聖母は、媽祖とも呼ばれる。媽祖の本名は、林默である。宋（960～1279）の初め、福建省莆田莆田県湄州嶼に生まれた。媽祖は、海の潮と嵐に対する靈感を持ち、よく漁民と船員を助けた。しかし、救難活動中に命を落とした。県民らは媽祖を記念する碑を建て、漁民・船員の安全を祈るようになった。その後、東南アジア、マカオ、台湾省の社会に広く神格化され、海の安全を守る神となるのである。おもしろいことに、閩南（漳州・泉州）人を中心とする台湾人が閩北に生まれた媽祖を祭祀するのは、何か特別な原因があるかもしれない。またマカオ人は、大半が広東人だが熱心に媽祖を祭祀する。しかし、同じく広東人を中心とする香港には、媽祖を祭祀する習慣はマカオほどにはない。

しかし、東南アジアの華人社会において、儒教の先聖先賢である孔子と孟子を祭る廟は、あまり見られない。（ただし、インドネシアだけは、政策上の判断で一時的に仏教を認めず、儒教については孔（子）教として宗教と認められた。）華人社会が儒教の先聖先賢を祭祀しないのは、最初の移住者に知識人と文化人が少ないことが原因かもしれない。或いは為政者が儒教を信仰し、民間の人々は道教を信仰する中国の伝統（得意者儒、失意者道）が、そのまま東南アジアにも流れてきたとも考えられる。

方言グループの住み分け現象（華人社会について—3を参照）を形成する原因と同じく方言グループも自分の都合に応じて信仰する神々を祭った。祭壇は、寺、廟、宮、観、庵、堂、室、殿、館、亭、祠、精舎、公司などの名目で作られた。学者によると、シンガポール島内には5000ヶ所以上の祭壇があり、一つの祭壇の中に複数の神々を設けるだけでなく、場合によって道教、仏教、神格化した人物を同じ廟の中に置くことは珍しくない。

表1： 華人社会の主な神祇

神祇	信者が所属する地縁団体	備考
大伯公	福建、潮州、広東、客家	ペナンで活躍した実在の人物を神格化したもの。東南アジアでしか見られない。
天后聖母 (天妃、媽祖)	福建、潮州、海南	神格化人物
関(羽)帝	福建、客家、広東	神格化人物
斉天大聖 (孫悟空)	広東・福建	西遊記の主人公
注生娘娘	広東・福建	新生児を管轄する神(想像上の人物)
釈迦	全ての地縁団体	仏教の創始者
観音菩薩	全ての地縁団体	仏教の神
阿弥陀仏	全ての地縁団体	仏教の神
彌勒仏	全ての地縁団体	仏教の神
玉皇大帝	全ての地縁団体	万能の王・道教
三元大帝	全ての地縁団体	道教の神
太上老君(老子)	全ての地縁団体	道教の教祖(春秋時代の思想家)
張天師	全ての地縁団体	道教の創始者
北斗九星	全ての地縁団体	道教の神

漢民族の方言は、8つのグループに分類できる。①北京方言、②湘(湖南)方言、③贛(江西)方言、④呉(江蘇・浙江)方言、⑤閩(福建)南方言、⑥閩東(北?)方言、⑦客(家)方言、⑧粵(広東)方言である。閩南語は主に福建省の東南沿海地区を中心に、厦門(アモイ)、泉州、漳州、龍岩の4市を管轄する37縣市を含める。閩南語は、福建省の最大の方言であり、国内外の閩南語の話者は6000万人に上る。(福建省誌、方言誌、福建省地方誌編纂委員会編、方言誌出版社。Pg88-89)。シンガポールの華人人口は閩南語系の福建人、潮州人、海南人が7割(華人社会について-2を参照)を占めるため、彼らが同じ神々を祭ることは理解できる。

華人の祭祇活動には、墓参り（毎年春分後の15日目の清明節）を通じて先祖を祭祀し、春・秋の2回廟などの祭壇での祭礼などがある。福建系の泉州、漳州の人々は、シンガポールに到着して間もない1827年、Selat Road に恒山亭という墓地を設置し、福建幫の最初の本部とした。1840年、Telok Ayer Street に天福宮を建て、天妃（后）、観音、関（羽）帝の神々を祭り、福建幫の総本部は恒山亭から1860年に福建会館を建てるまで天福宮に置いてあった。現在の福建会館は、天福宮の真正面にある。

初期の潮州系移民は、インドネシア領のリアウ諸島から来て、ガンビールの栽培をした。またタイに移住した一部の潮州人もシンガポールに再移住して、両地を往来した。その中の林泮氏という人物は1820年、シンガポール川の河口に粵海清廟を建てた。廟と呼んだが、実際は、屋根は椰子の葉（アタップ）で葺いた粗末な木造の小屋にすぎなかった。その後、海運業で富を蓄積した王豊順氏と王欽千氏の2人の手で、萬世順公司を創立して粵海清廟を管理したが、建物は相変わらず粗末だった。1845年、潮州系の著名人だった余有進氏ら14名は、義安公司（Ngee Ann City のオーナー）を設立して、墓地の購入や、粵海清廟を管理した。1852－1855年には今のPhilip Street に移り、1896年に大規模な改修を行った。粵海清廟が現在の立派な姿となったのは、1992年の改修の結果である。潮州人が老爺（神の意）宮とも称する粵海清廟の左の殿堂に天后（媽祖）を祭祀し、右の殿堂には道教の玄天上帝を祭祀した。

1928年9月15日、義安公司是余家族とその他の十二家族に独占されたことに不満を持った林義順氏（Yishunの地名は彼の名前に基づく）らは、中華総商会にてシンガポール潮州八邑（県）会館（潮安県、澄海県、潮陽県、揭陽県、饒平県、普寧県、恵来県、南澳県）という組織の準備大会を開いた。臨時事務所は、Nail Road の現在の潮州会館（1963年完成）に置いた。それ以来、義安公司是潮州会館に付属する。

広東幫は、広東省の珠江三角洲の広州を中心とする5邑（県）—南海県、順徳県、東莞県、番禺県、中山県と、珠江上流の4邑（県）—台山県、新会県、恩平県、開平県の2つの系統に分類できる。両系統の言葉は若干違い、職業も異なる。前者は商業、ホテル、広東料理店を営み、後者は建築用材木、レンガなど建材事業を営むものが多い。彼らは、同じ県出身の同郷者による業縁、血縁の要素が兼ねた組織をつくることが多い。

広東会館は、福建会館（1860）、潮州会館—義安公司（1845）、・州（海南）会館（1857）、客家会館（1923）より遅れて、1936年に設立された。しかし、広東人は、会館よりも先に広福古廟を建てている。広福古廟では毎年の春と秋の2回、祭祀が行われる。祭られている神は、注生娘娘（新生児を管理する神）、観音、齊天大聖（孫悟空）、関（羽）帝、華佗仙神（三国演義の神医）、張天師（道教の創始者）、魯班（春秋時代の名大工）なども含まれる。

客家幫は、3つの系統に分けられる。それは、①豊（順）永（定）大（埔）集団の豊順会館（1873）、永定会館（1916）、茶湯会館（1857）という地縁団体、②嘉応5県（梅県、蕉嶺県、五華県、興寧県、平遠県）につくられた応和会館（1823）、③惠州10県（恵陽県、博

羅県、龍川県、河源県、紫金県、海皇県、陸豊県、和平県、連平県、新豊県)の惠州会館(1870)。①の豊順と大埔は、地理上では潮州府に属したが、外来移住者であるため、言葉は潮州語とあまりにも異なることから潮州系の団体には受け入れられず、自らの地縁団体をつくった。また永定会館も福建省の汀州の地域に属したが、豊順と大埔と同様の動きを取らざるを得なかった。③の惠州10県はいずれも純客家県ではなく、広東省の4邑または5邑に近いので、客家系よりも広東の肇慶と共に広肇慶会館に参加した。

1923年には、湯湘霖氏の呼びかけで、南洋客属総会が成立し、1955年にはリー・クアンユー上級相を顧問として迎え入れた。1973年には、リー上級相を来賓として新会館をオープンさせている。客家人は、梧槽 (Rochor) 大伯公廟、福德祠などを建て、大伯公、関 (羽) 帝、太上老君 (老子) を神として祭っている。

海南島は、1984年まで行政上は広東省に属したが、言葉は広東 (府) 語、客家語、潮州語とは異なるため、早くから独立した幫 (派) を形成した。移住した人口は少なく、福建人や潮州人と比較して後着だったことから、相互扶助の精神が強く、団結力もあった。従って、・州 (海南の別称) 会館は1857年と早くに成立した。会館には、天后 (媽祖) が祭られている。

三江会館は、1908年に潘雲卿、曹祐昌、傅竺賢らが、三江公所を組織した。第二次世界大戦後に、三江人の人口が大幅に増加したことから、1946年にSt. Thomas Rdの建物を購入した。1972年7月に建て直した現三江会館は、1973年12月に完成した。三江人は一般的に浙江省、江蘇省、江西省の三省人を指していたが、1920年以降は中国の東北地方、揚子江中流の湖南省、湖北省まで含むようになった。中国では、三江幫と言わず、江 (蘇) 浙 (江) 幫と称する。

学者によると、最初に三江を使用したのは、清の同治 (清穆宗) 年間 (1862-1874) の頃、日本の長崎にある興福寺に三江祠堂を建設したときに初めて使用された。

以上、述べたことを、下記一覧表にまとめた。

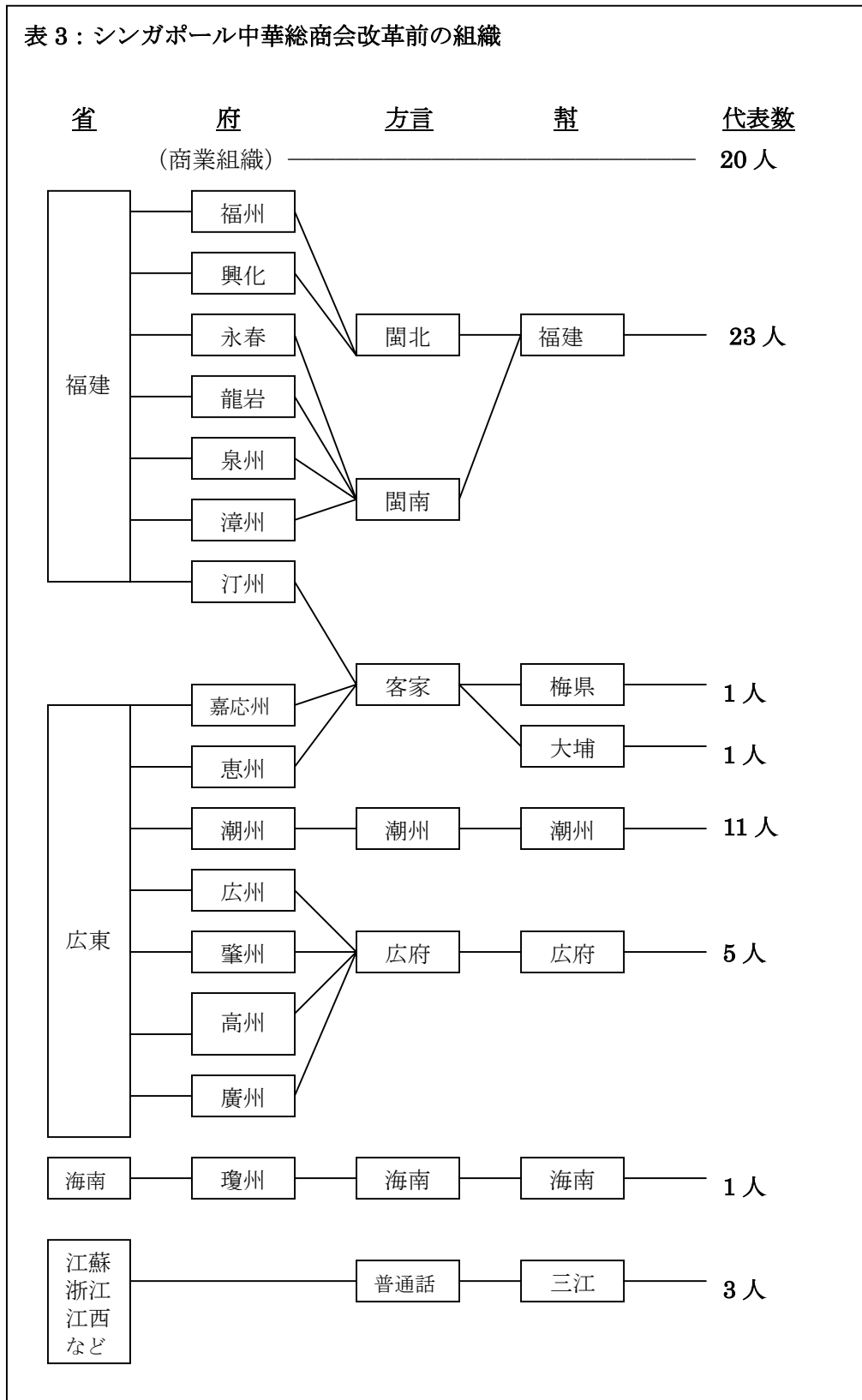
表2： 各方言幫の祭祀神と成立の年

方言グループ	カバー地域	祭祀神	成立の年
福建幫 (福建会館)	閩南、閩北	大伯公、媽祖、仏教と道教の神	1860年
潮州幫 (潮州会館)	潮安県、澄海県、潮陽県、饒平 県、普寧県、恵来県、南澳県	大伯公、媽祖、仏教と道教の神	1845年
広東幫 (広東会館)	南海県、順徳県、東莞県、番禺 県、中山県、台山県、新会県、 恩平県、開平県	大伯公、関帝、齊天大聖、仏教 と道教の神	1936年
客家幫 (客属会館)	梅県、蕪岭県、五華県、興寧県、 平遠県、大埔県、永定県	大伯公、関帝、仏教と道教の神	1923年
海南幫 (・州会館)	海南省	媽祖	1857年
三江幫 (三江会館)	江蘇省、浙江省など	明白でない	1908年

イギリス植民地政府は方言グループごとの幫がよく機能していることを見定めて、華人諮問委員会 (Chinese Advisory Board) の代表を、各幫の人口構成比に合わせて任命した。例えば、1895年の委員会は、福建幫は5名、潮州幫は5名、広東幫は4名、海南幫は2名、客家幫は1名で構成された。三江幫は人口が少ないので、代表として選任されなかった。その後、こうした分類と選出方法は、シンガポール、マレーシアとその他のアセアンの国々にも定着していったのである。表3に示したように、中華総商会は幫ごとの理事選出が、1994年に廃止されるまで続けられてきた。

しかし、このような分類と選出方法は、中国本土と若干異なり、行政地区を中心とするという特徴がある。例えば、潮州幫を広東幫に組み入れ、三江幫を江（蘇）浙（江）幫にすることだ。

表 3 : シンガポール中華総商会改革前の組織



## 血縁による幫

同じ姓氏（苗字）の人々が集まって出来た団体は、血縁の幫と呼ばれる。この幫は、地縁団体のように固定地域に限られることもあれば、省をまたがるところもあり、海の向こうまでまたがることもある。

血縁の幫のメンバーは原則的に、同じ血縁（家族・苗字）に限られるが、都合により複数の姓氏によって組織されることもある。しかし、血は水より濃いのことわざの如く、華人が血縁を重視しているのは、昔から中国人が孝により派生した氏族制度を大事にしてきたためである。また孝により、華人社会の一支流である海峡華人も先祖崇拜の慣習は今日まで継承する。

学者によると、三代（夏・殷・周）の前に姓氏を二つに分けて、男性は氏を称し、女性は姓を称した。また三代以後（秦・漢）は姓と氏が一つになった。（陳明遠、汪宗虎著、中国姓氏大全、北京出版社。Pg441）。そして、中国人の姓氏は、明の永楽帝（1403－1424）の時に編纂した「永楽大典（百科全書）」によると、次の9つの系統がある。（同上。Pg451）

- |             |                   |
|-------------|-------------------|
| 1. 先祖の族号による | 例えば、唐、虞、夏、殷       |
| 2. 賞賜の爵位による | 例えば、王、公、伯、侯       |
| 3. 国名による    | 例えば、齊、魯、宋、衛       |
| 4. 官名による    | 例えば、司馬、司空、司寇      |
| 5. 貴族の諡号による | 例えば、武、宣、穆、庄       |
| 6. 居住の地名による | 例えば、城、郭、園、池       |
| 7. 親類の順序による | 例えば、伯、仲、叔、季       |
| 8. 職芸による    | 例えば、陶、匠、巫、卜       |
| 9. 職務による    | 例えば、三鳥（大夫）、五鹿（大夫） |

中国の姓氏は秦・漢の時代、そして宋（960－1279）時代から現在まであまり変わっていない。もちろん、その間に消えた姓氏もあり、新しくつくり出された姓氏もある。宋の時代、ある儒学者は「百家姓」という本を編纂した。宋の皇帝の姓氏は趙であることから、百家姓では趙を一番目にしてある。百家姓というが、実際は504個の姓氏がまとめられている。

明の時代（1368－1644）に編纂された「千家姓」には、1968個の姓氏がある。中国科学院遺伝研究所の杜若甫研究員によると、現在漢民族の間で使用される姓氏は約3600個に上る。（聯合早報、1992年6月26日）。そして同紙の2003年7月6日付の報道によると、四川省遂寧市・案館の陳厲甫氏が収集した中華民族（少数民族を含む）の姓氏は19,989個ある。ともかく、漢民族がよく使用する姓氏は3000個に満たないと思われる。例えば北京市には2225個、上海市に1640個、瀋陽市に1270個、成都市に1631個、重慶市に1245個、武漢市に1574個、広州市に1820個しかない。つまり、この7大都市には合計2587個の姓氏しかないのである。

また台湾省には1694個の姓氏がある。(陳明遠・汪宗虎著、中国姓氏大全、北京出版社。Pg.463)そして、シンガポールの姓氏は246個ある。(邱新民著、新加坡宗教文化、星洲日報・南洋商報出版、Pg319)統計によると、漢民族の姓氏は吸収合併の結果、表3のように五大姓は、中国全土の約32.3%を占め、シンガポールの31.3%を占めている。

表4： 中国とシンガポールの主な姓氏と人口比率

中国の5大姓氏		シンガポールの主な姓氏	
姓氏	%	姓氏	%
李 (Li)	7.9	陳 (Tan,Tang,Chen)	9.9
王 (Wang)	7.4	林 (Lim,Lam,Lum)	6.9
張 (Chang)	7.1	李 (Lee)	4.6
劉 (Lin)	5.4	黄、吳、伍 (Ng)	4.4
陳 (Chen)	4.5	王、翁 (Ong)	2.8
		黄、王 (Wong)	2.7
合計	32.3	合計	31.3

出所：中国科学院遺伝研究所、Straits Times/聯合早報より作成

中国本土、台湾、香港、マカオ、アセアンの華人の李 (Li, Lee) の姓氏を持つ人口を合計すれば、李の総人口は日本の総人口に負けないだろう。また別の言い方をすれば、全世界の総人口の約60億人に対し、60人に1人は李さん (Mr.Li (LEE)) となる。

シンガポールの血縁団体は単独の姓氏の団体もあれば、複数の姓氏が集まって出来た団体もある。例えば、「古城会館」は地縁団体に見えるが、実際彼らは三国志演義の桃園結義の話しを真似て、劉 (備)、関 (羽)、張 (飛)、趙 (雲) の4つの姓氏の人々により設立された血縁団体である。また「六桂堂」は、洪、江、翁、方、汪、龔の6つの姓氏の人々により設立された血縁団体である。シンガポールまたはアセアンにおける華人の血縁団体を複雑にさせた原因は、複数の姓氏の団体の存在ではなく、姓氏の前に同じ出身地名をつけることである。例えば濟陽蔡氏公会は、潮州濟陽地方の出身の蔡の姓氏の人々しか、メンバーにはなれない。このように混合した団体は、血縁団体と呼ぶよりも地縁団体と呼ぶ方が適当だろう。シンガポールには現在、血縁団体としては185団体が登録してある。(表4) その中には、メンバーが数十人しかいない小さい団体も含まれている。

表 5: 幫の推移

登録年 団体型	-1900	1901-	1911-	1921-	1931-	1941-	1951-	1961-	1971-	合計
		1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1975	
血縁	2	1	3	4	28	46	45	56	0	185
地縁	9	4	6	8	29	30	36	30	0	152
業縁	4	5	5	10	21	17	34	62	26	184
商業	0	2	3	8	15	14	28	43	20	133
専門職	0	0	0	0	1	0	5	16	4	26
その他	4	3	2	2	5	3	1	3	2	25
合計	19	15	19	32	99	110	149	210	52	705

出所 : Government Gazette , 4 Jul. 1975

## 業縁による団体

華人の商業社会は他の民族と同様に、多くの業種別の団体組織がある。例えば雑貨商なら雑貨商協会があり、飲食業なら飲食商協会、質屋なら質屋団体がある。ただし、他の民族と違うのは、このような業種団体の大半が法人メンバーとして中華総商会に加盟していることだ。

シンガポール中華総商会は1906年に創立したが、1905年創立という説もある。第一次世界大戦後の不況時に、同会は急成長した。しかし、シンガポール独立後、政府は、伝統的な貿易と金融活動に加え、工業を自国の経済構造に組み入れたことから、国内の産業構造は変化し、中華総商会は団体として後退期に向かうことになる。中華総商会の会員は現在、4000人に上るが、団体会員は約120人、個人会員は数十名で、残りは中小企業を中心とする企業会員である。

シンガポール中華総商会の理事会の構造は表2に示したように、華人社会の幫派を最もよく反映する。即ち、幫派の勢力により、理事会のメンバーを選出しているのである。また戦後の1946年から、現在の2004年までの一期2年の会長ポスト（2期までしか務めることができない）の出身地は、表6に示したように、福建系24人、潮州系4人、客家系1人である。この事実からもシンガポールの経済が、福建幫に牛耳られていることは明らかである。

このような理事メンバーの分類と選出方法はシンガポールの国策・国情に合わないので、1994年にホンリョン（Hong Leong）グループのKwek Leng Joo（郭令裕）氏が会長に就任した時に廃止された。その代わり、7幫派の代表は最低1人ずつ理事会に送り出すこととなった。

しかし根深い幫派意識は10年経った現在もなかなか消えず、理事会は相変わらず福建系で占められている。シンガポールの経済活動の主力は、やはり福建系が握っているのである。

表6： 中華総商会の歴代会長（戦後）

年	名前	幫
1946/47	李光前	福建
1948/49	楊溢璘	客家
1950/51	陳六使	福建
1952/53	陳錫九	潮州
1954/55	高德根	福建
1956/57	陳錫九	潮州
1958/59	高德根	福建
1960/61	高德根	福建
1962/63/64	高德根	福建
1965/66	孫炳炎	福建
1967/68	孫炳炎	福建
1969/70	黄祖耀	福建
1971/72	黄祖耀	福建
1973/74	陳共存	福建
1975/76	陳共存	福建
1977/78	黄祖耀	福建
1979/80	林繼民	潮州
1981/82	林繼民	潮州
1983/84	陳共存	福建
1985/86	陳共存	福建
1987/88	林蔭華	福建
1989/90	林蔭華/陳永裕	福建
1991/92	陳永裕	福建
1993/94	郭令裕	福建
1995/96	郭令裕	福建
1997/98	鄭民川	福建
1999/2000	鄭民川	福建
2001/2002	郭令裕	福建
2003/2004	郭令裕	福建

## 結び

冠婚葬祭、病院、学校などを運営するために生まれた地縁と血縁団体は、時代の変化により現在ではその運営権はすでに独立した政府の手に移っている。独立するまで、華人の墓地は大半が、それぞれの地縁団体により多額の寄付金を集めて植民地政府から購入されたものだった。学校もそれぞれの地縁団体が、会員から寄付金を集めて建てられた。学校は小学校、中学校、高校だけでなく、高等学府である南洋工科大学 (NTU) と義安学院 (Ngee Ann Polytechnics) の敷地は、福建会館と義安会社がそれぞれ無償で寄付した。またタン・トクセン病院の敷地も、福建系の陳篤生により寄付されたものである。そして最近、土地所有権を政府に取り上げられて話題になった広肇慶病院 (セラングン・ロードにある) は、名前のおり広東幫の広肇慶系の所有地である。このように、シンガポールの独立後、学校、病院、墓地は政府の管轄下に置かれたことから、地縁団体、血縁団体の活躍の場はなくなってしまう。

一方、時代とともに冠婚葬祭の規模が縮小され、教育の普及により華人間のコミュニケーションは英語と華語 (普通話) になった。各方言グループ間の結婚も増え、表6に示したような異人種間の結婚も年々増えている。異人種間の結婚は1982年の1453例と比較して2002年までの20年間に2倍の2842例へと増えた。異人種間結婚は、英語を重視する教育と、グローバル化の結果と思われる。1982年から2002年までの異人種間結婚の合計の41924世帯に、1982年の前の異人種間結婚を合計すれば、5万世帯を超えるのは確実だ。この約5万世帯に平均4人を計算すれば、総人口の7-8%は「混血児」となる。この「混血児」は、華人社会の地縁や血縁団体とは縁が薄いようだ。

そして、華人の間には昔ほど自分の結婚相手に必ずしも同じ地縁の出身者を選ぶことはなくなっている。6つの地縁団体とその傘下の団体の中の「異地縁結婚」は、もはや日常茶飯事である。このような異地縁結婚の家庭は、地縁団体の活動にはあまり積極的ではない。また教育普及と情報公開により、青年達の活動は多様化し、選択肢も増えたことから、地縁団体と血縁団体に頼る必要はなくなった。

一方、コミュニティー活動は、地縁・血縁団体から人民協会 (People's Association (PA) , 首相の直轄下にある) に属するコミュニティーセンター (Community Centre) 傘下の住民委員会 (Resident's Committee—RC) に取って代わった。現在国内にRCが536カ所あり、地縁と血縁の団体の手の届かないところまでRCが存在するようになった。

以上の諸原因の結果、地縁又は血縁の団体の新規登録は70年代に入ってから、ほぼなくなってしまった。(表5) また、商行為も変化し、情報の透明度が高くなり、高学歴者が急増し、金融制度が発達すると、事業の展開にあたり伝統的な幫のネットワークに依存する必要はなくなったのである。

こうした環境の変化に幫の指導者は危機感を感じ、組織を改革したり、若年層の高学歴者を指導部に取り入れたりしたが、状況は思うように改善されていない。このため、1984年12月、7会館より、68団体の会員の発起で、1年間の準備の末、新加坡宗郷会館聯合總會

(Singapore Federation of Chinese Clan Association,略称：宗郷総会)が1986年1月27日に発足した。現在では、宗郷総会は189団体会員があり、トアパヨ (Toa Payoh) のLorong 2に総会ビルがある。しかし、若者はなかなか宗郷総会ならびに支会の地縁・血縁団体の会所に足を運ばない。如何に若者を引き寄せるかは、宗郷総会と支会の地縁・血縁団体の悩みの一つである。

ところが、近頃、香港や中国本土からの新移民がそれぞれ、九龍会と華源会を創立した。また一部の新移民はシンガポールの地縁または血縁の団体に加盟しているが、新勢力となるにはまだ時間がかかりそうだ。しかし、中国本土の目覚しい経済発展により、新移民の現地の華人社会への融合が遅れるのではないかと思われる。

表 7: 異人種間の結婚数

年	異なる人種間の結婚数 (A)	全体の結婚数に占めるAの割合 (%)	華人系の新郎とマレ 一系の新婦の数	インド系の新郎と華 人系の新婦の数
1982	1,453	6.3%	89	95
1983	1,420	6.5%	107	77
1984	1,480	6.0%	123	103
1985	1,419	6.2%	119	93
1986	1,318	6.7%	119	83
1987	1,389	6.0%	102	90
1988	1,643	6.7%	117	105
1989	1,596	6.8%	113	99
1990	1,831	7.6%	105	132
1991	1,823	7.4%	119	105
1992	1,958	7.6%	122	142
1993	2,031	8.0%	124	112
1994	2,169	8.8%	126	116
1995	2,250	9.0%	162	151
1996	2,272	9.4%	146	165
1997	2,290	8.9%	174	156
1998	2,496	10.8%	204	165
1999	2,706	10.6%	255	170
2000	2,724	12.1%	266	132
2001	2,814	12.6%	281	155
2002	2,842	12.3%	337	159
合計	41,924	-	3,310	2,605

出生： Straits Times- Life Section 3 Aug.2003